

総評 2023年8月分 杉本真維子

「図書館の街路樹皆殺しに遭い／木から流れる血の匂い嗅ぐ」 貴田雄介（熊本県）
このように人間の横暴をあばくことも言葉の仕事でしょう。

「値引き値と以前の定価が同額で／僕は騙されてるんだろうか」 貴田雄介（熊本県）
声へと一歩踏み出した、からだの奥の言葉だと感じられます。

「筆圧の光の太さ年賀状」 奎いう子（佐賀県）
筆圧の光、しかもそれが太いということ。それだけで「年賀状」の本質が語られています。
視点が鋭いと思います。

「小松菜を／こつなと呼んでよろしいか」 松下誠一（東京都）
よろしいか、という疑問形が面白いです。トボけた言葉の雰囲気にもまれて、「あ、はい」
と軽く答えてしまいそうになりますが、「こつな」でよろしいわけがありません。

「あの虫は窓の向こうか日雷」 松下誠一（東京都）
チカチカと光を浴びる虫とそれを眺めているやわらかな眼差しが抒情を醸しだしています。

「丸い背に翻弄される夏の果て／夕刊にわたしの名の犯罪者」 井口可奈（東京都）
突然目に飛び込んでくる現実感。1行目の曖昧さが2行目を引き立てています。

「身を任す吊り革両手足荷物／現代人の祈りだこれだ」 金谷シメ（大阪府）
全身が映し出されていて迫力があります。疲れきった身体が祈りへと開花するかのようです。

「深更に／雨夜の星から見る東京／麗しいこと夜勤の如く」 道標モニカ（愛媛県）
「麗しいこと夜勤の如く」の「夜勤」が効いています。モダニズムのきらめきを味わいました。

「あいされる／ ために／産まれてきたような／にゅうどうぐも を握りつぶして」 さいう（愛知県）
感触をもたないはずの「にゅうどうぐも」に感触を与え、その感触によって、人間があいされるために産まれてきた、ということを暗に語っています。巧みです。

「雲一つないとあなたが笑うから／そっと視野から外した筋雲」 源楓香（東京都）
まなざしがとても繊細。この小さなふるえを大事に守りながら、どんどん書いていってほしいと思います。

「ピアノは華美でにんきもの／私の体つきもそう／さわってドレミファソラシド」 杉本太（北海道）
みずみずしい楽器のような身体が鳴らず、明るい音を、聴いてみたくなりました。

「細長い背高泡立草の家」杉本太（北海道）

一行の文字の並びそのものが家のつくりを表すかのようです。オブジェー詩（視覚詩）ともいえるかもしれません。

「ぬかるみ泥濘でいどろろ／夏に濡れて光った／／ね、端っこ乾いてきてる」白藤さくら（神奈川県）

手付かのような生まれたての言葉に、命が宿っています。

「夏はここ／／すいかの種／もろこしのひげ」桜咲（千葉県）

なるほど、黒い種のつや、もろこしのひげのくすぐったさが、夏を運んできます。

「目覚めれば布団に鋳型できており／メキメキ昨日のわれ壊し出る」スズキセイホン（千葉県）

象られた「われ」という見えないものに生きる力を語らせる、というのは新鮮ですね。これはかなり優れた作品です。「メキメキ」も大変効いています。

「葉脈が血管みたい／その逆を言うためだけに／光りませんか」うかつな（東京都）

光りませんか、という勧誘が面白いです。光るものは、じつは何かに誘われて光っているのかもしれないね。

それでは次回も楽しみにお待ちしております。